

## 学位論文の要旨

専攻 社会文化学専攻  
学生番号 75423102  
氏名 金田 法子

### 1 論文題目

#### ジョイスの戦争

短篇集『ダブリンの市民』の中の作品、「姉妹」・「恩寵」にみる教会批判

### 2 論文の要旨

アイルランドの作家、ジェイムズ・ジョイスは20世紀最大の作家と言われる。代表作には、『ダブリンの市民』、『若い藝術家の肖像』、『ユリシーズ』、『フィンネガンズ・ウェイク』がある。

ジョイスが生きた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アイルランドは未だイギリスの植民地であった。首都ダブリンには困窮者が溢れ、そこは「ヨーロッパの中で最も不健康な都市」と言われた。

当時、ダブリンの住民の約90パーセントをカトリック教徒が占めており、人々と「教会」とは密接不可分の関係にあった。人は誕生すると教会で「洗礼」を受け神の子となる。その後、「堅信」を受け信仰を堅固なものとする。日々の礼拝に参列し「聖体」をいただき、神の御言葉の伝達者である司祭の言葉に導かれ、神の所望される生活を送る。信者は日々の行動を省み、罪の認識があるのであればそれを司祭に告白し悔い改め、赦しを請う。結婚に当たっては司祭から祝福を受け、死の際には司祭から「終油」をいただき神の世界への導きを得る。このように、生を受けた時から死に至るまで、人々が教会の介在なしに生活を営む事は事実上不可能な仕組みが作られていた。

それに対しジョイスは、「教会はアイルランドの敵」(the enemy of Ireland)であり、「私は、書くもの、語ること、行うことによって、それ(教会組織)に公然と戦争を挑みます」(I make an open war upon it by what I write and say and do.)と記した。ジョイスが文筆家である限り「書くもの」とは彼の文学作品にほかならず、彼は自らの「武器」である文学を剣に公然と教会に挑むと述べたと解釈できる。

本論は「ジョイスの戦争」をテーマとし、彼が「教会」のどのような行為に対して疑義を募らせ、それを拡大・発展させ、最終的には教会を「敵」と定め、それへの批判を自らの文学を通じ展開するようになっていったのか。具体的には、作中において、彼はどのような舞台を設定し、どのような人物たちを登場させ、何を語らせ、それをどのように教会批判に導いていったのか。その結果、「ジョイスの戦争」は彼にどのような帰結をもたらしたのかを、『ダブリンの市民』の中の作品、「姉妹」及び「恩寵」を研究対象として採り上げ論述する。

まず、第一章「先行研究」において、従来の研究について考察する。ジョイスは生誕100年を迎えるまで「アイルランド人の作家」として認められていなかった。したがって、ジョイス研究はアイルランドをその起点としていない。本章ではジョイス研究がいつ、どこで、どのように開始されていったのか、その軌跡を辿る。

第二章では、ジョイスの文学作品と文学手法について論考する。彼は「意識の流れ」・「内的独白」と言われる文学手法を用いた。本章では、個別の作品の分析を開始するに当たって、この手法とはどのようなものかについて確認する。その後、ジョイスの主な文学作品を取り上げ、その作品の概要、出版の経緯、及びそれらに対する評論について考察する。

第三章では、短篇集『ダブリンの市民』の冒頭に置かれた作品「姉妹」を取り上げ、この作品の中でジョイスがどのような教会批判を展開しているのかを論考する。ジョイスは、この物語の舞台として聖キャサリン教会を設定した。当時、アイルランドには1,805の教会が存在した。なぜ、彼はアイルランドに数多ある教会の中でこの教会を選択したのか、その背景と意図に迫る。

第四章では、短篇集の巻末に置かれた作品「恩寵」について考察を行う。ジョイスはこの作品を短篇集のフィナーレを飾る重要な作品と位置付けた。本章では、「恩寵」の中で、ジョイスがどのような教会批判を行なっているのかについて論考する。また、彼はこの物語の主要舞台として聖フランシスコ・ザビエル教会を選定した。本章では、この教会の選択の背景とその狙いについて論考する。

ジョイスは当時アイルランドを支配していた勢力として、イギリス及びカトリック教会を挙げ、それらを自らが仕える「二人の主人」と称した。第五章では、近代アイルランド史を辿りながら、ジョイスがなぜこの二つの勢力を「主人」と呼ぶまでに至ったのか、その背景を探求する。

第六章、及び、第七章では、「ジョイスの生涯」1、2、と題し、彼の生涯を教会批判の観点から論述する。教会批判の背景には、ジョイスの家庭環境や教育、また、社会生活における何らかの充足されない感情の鬱積があったのではないか。そうした存在が認められるのであれば、それは何か。本章ではジョイスの個人的な生活面に焦点を当て、彼の教会への敵対心がどのように醸成され、拡大・発展していったのか、その真相に迫る。

本研究の多くは、筆者によるアイルランド、ダブリン市での現地調査に基づく。具体的には、「姉妹」及び「恩寵」の舞台となった教会を訪れ、司祭や修道士たちに対しヒアリング調査を行った。また、改名はしているが、作品に登場する工場や街路、酒場や商店など現存する場所を訪れた。さらに、ジョイスが学んだ教育施設を訪ね、彼が学び、遊び、友人たちと交流し、思考した場所を見学した。加えて、ジョイスが誕生したダブリンの質素な家、一家の困窮から幾度も転居を強いられ、彼の愛した両親と九人の兄弟や姉妹たちと重なり合って暮らした家々を訪ねた。

本論は、こうして得た実証データや情報を多角的・総合的に分析し、「ジョイスの戦争」とは何であったのか、考察を試みたものである。